青年期女子における
対人恐怖的心性とロールシャッハ反応についての研究

野　崎　知　子[注]

Research on Athropophobic Tendency and Rorschach Responses in Female Adolescence

Tomoko Nozaki

Ⅰ．問題と目的

対人恐怖とは、笠原（1993）によれば、「他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人に軽蔑されるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型」である。全体として男性に多く、主として青年期の病態で、中年期まで持続することは稀な日本ではよくみられる神経症類型であるとされている。亜型として、赤面恐怖、視線恐怖、正視恐怖、体臭恐怖、醜形恐怖、吃音恐怖などがある。対人恐怖は一つの症状に付けられた診断名ではなく、亜型の症状群のいずれも対人状況において生じる症状というところから命名されたものである。

日本人の心性の中には、対人恐怖と言えぬまでもそれに近い、サブクリニカルな状態を青年期の一時期にもつ人は多いと言われている。このように、対人恐怖の発症に直接結びつかないまでも、青年期において一般に見られる対人恐怖的な現象は「対人恐怖的心性」と呼ばれている。対人恐怖的心性の例として、人見知りや過度の気遣い、対人緊張などが挙げられる。ただ、この心性を有する程度は各個人様々で、健常青年の中にも対人恐怖症を発症しないまでもその心性が強すぎて対人関係上の不安や悩みを多く抱えている人もいれば、それほどもたないまま青年期を過ごす人もいる。実際に、健常青年の対人恐怖的心性の実態を調査した木村（1982）は、大学生501名に対人恐怖症の事例をあげて講義を行った後に、感想を提出させたところ、対人恐怖について書くことを指示しない状況で、50.9%の学生が視線恐怖、スピーチ恐怖などの対人恐怖症的な体験を訴えたと報告している。このように、日常生活の中で多くの健常青年に対人恐怖的心性は意識されていると言える。

青年期は子どもから大人へと移行する時期であり、この短い間に身体成熟が生じ、心身ともに大きく変化する。自我の発達から見ても、青年期は最も自己意識の高まる時期であり、自己をあたかも他者の目で見るような自己意識が現れ、自分自身を客観的に見つめるとき多くが否定的になり、自己を受容できず情緒的にも不安定な時期にあると言える（詫摩、1974）。また、青年期は自我同一性の確立を目指していくつかの課題を乗り越えていかねばならない時期であり、その課題遂行の過程での挫折などが種々の問題が生じる要因の一つだと考えられる。そのため、心身の発達のバランスは崩れやすく、常に不安定な均衡の中にある。対人恐怖と対人恐怖的心性が青年期に生じやすいことから、このような青年期における心理傾向や青年期特性と密接に結びついた問題と考えられる。

これらのことから、青年期を理解する上で、青年期の特徴の一つである対人恐怖的心性について研究することは意味があると思われる。

現在までに、対人恐怖的心性の質問紙を用いた研究は数多く行われているが、投影法を用いた対人恐怖的心性の研究については数が少ない。ロールシャッハ・テストを用いた研究については、神谷(1999、2000)と相河(2003、2004）を挙げることができる。神谷は対人恐怖心性尺度（堀井・小川、1996）を用い、他者に対する関心や感受性を表す人間反応（以下、H反応と記す）に注目している。ロールシャッハ指標として、①H反応→H%の値、H＋Hdと(H)と(Hd)の出現数平均、H＋Hd＜(H)＋(Hd)、②決定因がM反応であるH反応の出現数、③カードⅡ、Ⅲ、ⅦでのH反応、つまり平凡反応のH反応の出現数、④(H)＋(Hd)の内容　⑤衣服の言及、⑥２人の人間像が見られた場合、その２者間の相互交流の在り方を用いて検討している。ロールシャッハ指標は、いずれも有意差は見られなかったが、いずれの群の被験者もH＋Hdの出現が多かった。対人恐怖的心性の程度に明らかに差があっても、H反応に反映される対人関係の在り方には違いがなかったという結果を報告している。また、相河は対人関係質問票（林・小川、1981）を用い、ロールシャッハ指標として顔反応を用いて検討している。顔反応の出現率は対人関係質問票の高得点群の方が高く、全被験者の顔反応の出現率は19.1%で、カードⅠ・Ⅹが特に高かった。考察では、対人恐怖的心性の高い人は外

界に主観的なイメージを投影しやすく、他者との適切な距離を取りにくいことを報告している。これらの研究ではロールシャッハ変数との有意傾向は見られるが有意差は認められていない。

これらをふまえて、神谷の研究では、H反応を中心に指標を限定したことで有意差がでなかったと考えられるため、本研究では筆者が修正を加えた指標を追加することとする。また、両研究では数量分析で検討しているため、本研究では、数量分析に加えて反応内容を詳しく見ていき質的観点からも分析し検討する。

神谷（1999、2000）を基に、本研究の仮説は、①対人恐怖的心性の高い群は低い群より、衣服反応が多く出現する。②対人恐怖的心性の高い群は低い群より、人間全体反応より人間部分反応が多く出現する。③対人恐怖的心性の高い群は低い群より、特殊な人間像が多く出現する、以上の3点を検討するためにも、ロールシャッハ・テストを用いる。

本研究では、対人恐怖的心性の程度によってロールシャッハ・テストの反応内容の表れ方に違いが見られるのかを検討する。表れたロールシャッハ反応から、心性の高い人と低い人、それぞれの対人関係の在り方や不安などの人格特性の傾向を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方　法

1．質問紙

本研究では、青年期の対人恐怖的心性を測定するために、対人恐怖心性尺度（堀井・小川、1996）を使用している。この尺度は、対人不安質問票（小川、1974）を改訂した質問紙である。対人不安質問票は、対人恐怖症者の自由記述や面接調査、および心理テストの項目などを参考に、対人恐怖的傾向に関連する項目を収集し、一般学生と対人恐怖症者の間で統計的に差の見られた項目を抽出して作成された質問紙である。従来、対人不安質問票とその改訂版（林・小川、1981）が用いられてきたが、症状の変遷や項目表現の難解さ、項目数の多さなどの問題をふまえて、再度改訂されたものである。したがって、対人恐怖心性尺度は日本人的な対人恐怖心性をよく反映したものと言える。

対人恐怖心性尺度は、「自分や他者が気になる悩み（尺度Ⅰ）」「集団に溶け込めない悩み（尺度Ⅱ）」「社会的場面で当惑する悩み（尺度Ⅲ）」「目が気になる悩み（尺度Ⅳ）」「自分を統制できない悩み（尺度Ⅴ）」「生きることに疲れている悩み（尺度Ⅵ）」の6つの下位尺度から構成されている。採点方法は、各項目について「全然当てはまらない」を0点、「非常に当てはまる」を6点とし、合計得点を算出する。得点の範囲は全体で0点～180点、下位尺度で0点～30点となり、合計得点が高いほど対人恐怖的心性が強いことになる。

さらに、同様の尺度を用いた神谷（1999、2000）の研究で、尺度差に男女差が見られなかったため、本研究では被験者を女性のみに絞っている。

2．被験者

被験者は女子大学生、大学院生150名（平均年齢20.19歳、標準偏差27.4）に対人恐怖心性尺度を集団や個別で実施した。集計の結果、平均得点74.7（標準偏差27.4）、尺度Ⅰ：平均得点14.7（標準偏差6.0）、尺度Ⅱ：平均得点11.8（標準偏差7.4）、尺度Ⅲ：平均得点14.9（標準偏差7.4）、尺度Ⅳ：平均得点9.4(標準偏差6.6)、尺度Ⅴ：平均得点13.1(標準偏差6.3)、尺度Ⅵ：平均得点10.8(標準偏差6.7）となった。尺度得点から高得点群（以下、H群と記す）と低得点群（以下、L群と記す）に分類する際に、神谷（1999、2000）を参考にした。神谷（1999、2000）は、尺度得点が平均得点＋1標準偏差以上の人をH群、尺度得点が平均得点±1／2標準偏差以内の人を中得点群、尺度得点が平均得点－1標準偏差以下の人をL群としている。そこで、本研究では、尺度得点が平均得点±1／2標準偏差以内の人を中間群と考え、尺度得点が平均得点＋1／2標準偏差以上の人をH群、尺度得点が平均得点－1／2標準偏差以下の人をL群とした。t検定の結果、H群とL群のすべての下位尺度に0.1%水準で有意な差が見られた（Table 1）。これにより、H群とL群には、合計得点だけでなく、下位尺度得点でも差があることが明確になり、群の分け方に妥当性があると考えられる。

H群とL群の該当者にロールシャッハ・テストの協力を依頼し、最終的にH群10名、L群15名の合計25名を本研究の対象者とした。

Table 1　各尺度得点の平均得点と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=86
尺度Ⅰ	19.70	5.20	9.87	4.71	9.3＊＊＊
尺度Ⅱ	18.21	6.45	5.67	4.08	10.95＊＊＊
尺度Ⅲ	21.56	5.28	9.42	6.34	9.73＊＊＊
尺度Ⅳ	14.19	7.10	4.80	3.93	7.62＊＊＊
尺度Ⅴ	17.51	6.06	8.58	4.66	7.73＊＊＊
尺度Ⅵ	15.47	6.00	4.64	3.48	10.29＊＊＊

＊＊＊ $p < .001$

3．手続き

各被験者に、個別にロールシャッハ・テストを施行した。また、施行法とスコアリングは片口（1987）に従った。スコアリングについては、筆者と他のロールシャッハ・テスト経験者1名、合計2名との合議の上で行った。分類の際には2名の意見が一致したものを採択し、一致しなかった場合は2名の合意が得られるまで議論した。

Ⅲ．本研究で用いた指標

本研究で用いた指標は、神谷（1999、2000）を参考に、筆者が修正を加えた独自のものを合わせて用いている。

1．H反応の出現

H反応は他者に対する関心や感受性を反映することから、被験者の対人関係を知る上で重要な指標とされている。従来から、対人恐怖症者はH％が高く、非現実人間反応＝(H)＋(Hd)の出現率が現実人間反応＝H＋Hdよりも多いと言われ、人間を全体で見ている人間全体反応＝H反応より顔反応など人間を部分で見ている人間部分反応＝Hdの方が不安が高いと言われている（神谷、1999)。Hd反応は人間関係を処理するにあたり、不安が存在することを示しているからである。対人恐怖症者と対人恐怖的心性の度合は異なるが、症状が同じ傾向にあるため、重要な指標として取り上げることとする。これらのことから、本研究では、H＋Hdと(H)＋(Hd)の出現数平均、H＋Hd＜(H)＋(Hd)、及び、H＋(H)＜Hd＋(Hd)の出現数の比較を2群間で行った。

2．(H)＋(Hd)の内容

(H)と(Hd)は、一般に、現実の対人関係に不安を抱き、空想的な世界に逃避する傾向を示すと言われているが、(H)＋(Hd)の出現率は健常成人に最も高く、これが直接問題となるわけではない。堀尾（1973）は、対人関係に障害を持つ青年における(H)＋(Hd)の内容は、“化物”や“悪魔”などの不快でネガティブな人間像が大部分であったと述べている。したがって、(H)＋(Hd)の内容を検討することは、不安の度合や他者をどのような存在として捉えているかを知る手がかりとなる。そこで本研究でも、高橋(1977)を参考に、①「脅威的」(“悪魔”“怪物”“巨人”など脅威的・不気味な印象を与える想像上の人間)、②「好意的」(“天使”“妖精”など、人間に対して害を与えることのない、どちらかというと好意的な想像上の人間)、③「その他」(中立的であまり感情が含まれていない反応)、という3つのカテゴリーに分類した。

3．決定因が人間運動反応＝M反応であるH反応の出現数

決定因がM反応のH反応は、成熟した社会適応力を維持するために必要な対人関係への感受性を表すと言われている。そこで、H反応の出現数平均に2群間で差が見られるか比較した。

4．M反応の内容と質

見られたH反応の2者間に友好的・協調的な関係を見ることは、成熟した良好な対人関係を保つことができる能力を表すと言える。そこで、本研究では、2人の人間像が見られた反応における2者間の相互交流のあり方を検討する。①「友好的な交流」(“2人で荷物を持っている”“向かい合って踊っている”など2者間に友好的・協調的交流を見る反応)、②「攻撃的な交流」(“争っている”など攻撃的な関係が見られる反応)、③「交流がない」(“向かい合っている”など積極的に相互交流が見られない反応）という3つのカテゴリーに分類し、2群間で出現数の比較を行った。さらに、M反応の内容だけに注目するのではなく、形態認知の正確さや明細化の適切さなどの良好な質と合致してこそ、健康度の高さや対象関係能力を示すことができると思われる。その質の重要性も考慮するため、以下のM反応の形態水準の比較も検討する。

M＋％…優秀・良好水準の人間運動反応数の人間運動反応全体に対する比

M－％…許容・不良水準の人間運動反応数の人間運動反応全体に対する比

5．カードⅡ、Ⅲ、ⅧでのH反応、つまり平凡反応のH反応の出現数

平凡反応としてのH反応を見ることは、被験者が所属する集団の中で同じような思考や行動をとっていくことができ、適切な人間関係を保つことができる能力を表していると言える。そこで、本研究では、一般的にもH反応の見えやすいと言われているカードⅡ、Ⅲ、ⅧのH反応の出現数の平均を2群間で比較した。

6．衣服への言及

衣服反応の出現は、自分が他者からどのように見られているかという対人意識に関係しており、さらに上に着て身体を隠す衣服は、対人不信感を表すことが多い（高橋、1981)。村澤（2003）は、対人恐怖症群の衣服反応の出現率が大学生群に比べて有意に低かったことから、対人恐怖症群の対人意識の低さを述べている。しかし、対人不信感や対人意識は対人恐怖的心性の表れと考えられるため、重要な指標として取り上げた。本研究では、衣服や装身具のみの反応、人間や動物がそれを身につけている場合でも同等に反応として扱う。木場・木場（1980)を参考に、①「一般的な衣服」(“スカート”“帽子”など装飾的・保護的なニュアンスをもたない一般的なものや、特殊でないもの、明確化されていないもの)、②「特殊な衣服および明細化された衣服」(“仮装服を着た人”“長いスカート”などそれ自体が特殊な衣服や修飾語によって明細化されている衣服)、③「保護的な機能をもつ衣服」(“カブト”“鎧”など自分の身を守るための衣服)、④「装身具」(“リボン”“羽”など)、4つのカテゴリーに分類した。

また、本研究では、衣服反応＝Clothに加えて、装飾品＝Ornamentや武器＝Armsを含めた出現数を2群間で比較した。Cloth、Ornament、Armsに関しては、4つの

カテゴリーに含まれるもののみ扱うこととする。目的に沿って、本研究では、“カーペット”のClothは省き、Ornamentに関しても置物を飾る反応は省き、Clothに近い属性のものに限り取り上げることとする。

7．目反応＝Eyeの出現

Eye反応の出現は、他人の考えや動機に過敏で猜疑心を持ち、他人を意識しすぎていたり、劣等感を表すと言われている。人間像のある部分が特に関心をもたれるということは、その部分に過度な注意がよせられていると考えられる。堀尾（1973）は、「Eyeに意識が集中しているということは、対人関係における“見る”ということにつながり、その目を通して自分や他者の存在を見たり、見られている自分と見ている自分が意識される媒体である」と述べている。対人関係に何らかの不適応感をもつ者にとって、目に過度な注意を持つことの意味は大きいと思われる。そこで、本研究では、Eye反応の出現数が2群間で差があるのか比較する。また、どのような目を見ているかを知るために、反応内容も検討することとする。反応内容の分類に関しては、出現した内容から、高橋（1977）の(H)の分類を参考に、①「脅威的」（怖いなど恐怖の感情を含んでいる反応)、②「好意的」（優しいなど好ましい感情を含んでいる反応)、③「その他」（中立的であまり感情が含まれていない反応)、という3つのカテゴリーに分類する。

また、本研究では、単なる場所の指摘ではなく、「この目がにらんでいる」などのように強調されている反応に限りスコアしている。その際、目的に沿って、本来の片口法の見方と異なり、主分類・副分類に関係なく出現したEye反応を一つとして扱い出現数を検討する。

8．仮面反応＝Maskの出現

Mask反応は、一般に自分の中にある攻撃性や劣等感などを、そのまま表出することを回避したり、自分に求められている社会的役割を演じようとする人に生じやすいと考えられている（高橋、1981)。そのため、対人関係のあり方を検討する際に参考になると考えられるため、本研究では、Mask反応の出現数を2群間で比較する。また、反応内容の分類に関しては、出現した内容から、高橋（1977）の(H)の分類を参考に、①「脅威的」（怖いなど恐怖の感情を含んでいる反応)、②「好意的」（優しいなど好ましい感情を含んでいる反応)、③「その他」（中立的であまり感情が含まれていない反応)、という3つのカテゴリーに分類する。

本研究では、目的に沿って、本来の片口法の見方と異なり、主分類・副分類に関係なく出現したMask反応を一つとして扱い出現数を検討する。

9．立体反応＝FKの出現

ＦＫ反応は、内省によって内在する不安に対して、距離をとって客観的に解消しようとすることを表している（高橋、1981)。この反応が出現するということは、自己評価ができるよい適応力を表しているため、2群間で不安の処理の仕方に違いがあるのかを検討するために、本研究では指標として取り上げることとする。2群間での出現数の比較の他に、どのような反応で出現しているのか検討するために、出現した内容から分類する。さらに、ＦＫ反応の出現だけに注目するのではなく、形態認知の正確さや明細化の適切さなどの良好な質と合致してこそ、不安に対する適切なコントロールを示すことができると思われる。その質の重要性も考慮するため、以下のＦＫ反応の形態水準の比較も検討する。

ＦＫ＋%…優秀・良好水準の立体反応数の立体反応全体に対する比

ＦＫ－%…許容・不良水準の立体反応数の立体反応全体に対する比

本研究では、目的に沿って、本来の片口法の見方と異なり、主分類・副分類に関係なく出現したFK反応を一つとして扱い出現数を検討する。

Ⅳ．結　果

1．ロールシャッハ変数

Table 2に、主要なロールシャッハ変数の平均値と標準偏差を群毎に記した。t検定の結果、有意な差は見られなかったが、不自然形態色彩反応＝Ｆ/Ｃで10%水準の有意傾向が見られた（t (23)＝9.00、p<.10)。Ｆ/ＣはＨ群のみで出現し、Ｌ群では出現していない。

2．ロールシャッハ指標

本研究では、出現率については、t検定を行ない2群間の比較を行った。内容分類については、x^2検定によって出現度数の比較を2群間で行った。なお、本研究では出現度数の比較の他に、一元配置分散分析を行い、Tukey法による多重比較を行うことで、群内の差を明らかにして特徴を検討する。

(1)　Ｈ反応の出現

Table 3には、Ｈ＋Ｈｄ、(Ｈ)＋(Ｈｄ)、Ｈ＋(Ｈ)、Ｈｄ＋(Ｈｄ)の平均値と標準偏差を群毎に記した。t検定の結果、いずれの指標にも有意な差は見られなかった。Table 4には、Ｈ＋Ｈｄと(Ｈ)＋(Ｈｄ)、Ｈ＋(Ｈ)とＨｄ＋(Ｈｄ)のいずれの出現数が多くなっているか、各群毎にその人数を記した。両群共に、Ｈ＋ＨｄとＨ＋(Ｈ)の出現が多くなっているのがわかる。

(2)　(Ｈ)＋(Ｈｄ)の内容

Table 5に(Ｈ)＋(Ｈｄ)の内容を分類した結果を記した。x^2検定の結果、５%水準で有意な差が見られた($x^2(2)$＝12.69、ｐ<.05)。分散分析の結果、Ｈ群に有意な差

Table 2　主要なロールシャッハ変数の平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
R	23.70	12.07	20.20	6.29	0.84
W%	60.00	22.42	68.13	23.01	0.88
D%	28.60	15.51	24.20	19.25	0.60
Dd%	8.70	9.02	5.87	7.40	0.86
S	2.45	2.01	2.17	1.18	0.45
F	10.70	9.14	7.47	4.22	1.05
M	4.35	2.42	3.93	1.99	0.47
FM	2.70	1.81	3.40	2.34	0.80
Fm+mf+m	3.85	2.20	4.17	2.50	0.33
FK	1.10	1.13	1.57	1.55	0.88
FC	2.25	2.00	2.37	1.39	0.17
FC'+C'F+C'	1.80	0.89	1.67	0.94	0.36
Fc+c+C'	2.75	1.16	3.10	1.54	0.61
CF+C	1.75	1.80	1.47	1.06	0.50
F/C	0.25	0.42	0.00	0.00	1.86†
ΣC	3.18	2.20	2.81	1.44	0.51
ⅧⅨⅩ/R%	31.60	5.74	30.87	7.87	0.25
F%	40.00	18.58	34.73	13.37	0.83
ΣF%	95.60	4.79	96.80	4.44	0.64
F+%	65.80	21.36	75.20	16.98	1.17
ΣF+%	72.60	17.62	75.13	11.43	0.40
R+%	71.70	18.42	73.00	10.58	0.20
H%	26.10	5.72	30.67	10.01	1.45
A%	42.70	16.18	41.87	11.96	0.15
At%	0.30	0.95	0.53	1.41	0.46
P%	24.00	15.22	23.27	9.78	0.15
C.R	8.00	3.30	6.47	2.62	1.29
D.R	6.40	1.43	5.80	1.26	1.10

† $p < .01$

Table 3　H反応の平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
H+Hd	4.60	2.59	3.80	2.14	0.84
(H)+(Hd)	1.60	1.43	2.07	1.28	0.85
H+(H)	4.30	1.64	4.00	2.33	0.35
Hd+(Hd)	1.90	1.97	2.00	1.60	0.14

Table 4　H反応の出現内訳（人数）

	H群	L群
H+Hd<(H)+(Hd)	1	3
H+Hd≧(H)+(Hd)	9	12
H+(H)<Hd+(Hd)	1	3
H+(H)≧Hd+(Hd)	9	12
合計	20	25

が認められ（$F(2,27)=3.90$、$p<.05$）、多重比較の結果、「その他」より「脅威的」の方が5％水準で有意に高かった（脅＞他）。一方、L群にも有意な差が見られた（$F(2,42)=4.00$、$p<.05$）。多重比較の結果、「脅威的」より「その他」の方が5％水準で有意に高かった（他＞脅）。

Table 5　(H)＋(Hd)反応の内容分類

	H群	L群
脅威的	10 (62.5)	4 (13.8)
友好的	4 (25.0)	9 (31.0)
その他	2 (0.1)	16 (55.2)
合計	16	29

( ) 内は％

(3)　決定因がM反応のH反応の出現数

Table 6 に決定因がM反応のH反応の平均値と標準偏差を記した。t検定の結果、有意な差は見られなかった（$t(23)=0.11$, n.s.）。

Table 6　決定因がM反応のH反応の平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
M+H	2.60	1.65	2.53	1.46	0.11

(4)　M反応の内容と質

Table 7 に2人の人間像の相互交流の内容、Table 8 にM反応の形態水準の平均値と標準偏差を記した。2人の人間像の相互交流の内容についてのx^2検定の結果、5％水準で有意な差が見られた（$x^2(2)=11.67$、$p<.05$）。分散分析の結果、H群に有意な差が見られた（$F(2,27)=6.44$、$p<.01$）。多重比較の結果、「攻撃的な交流」より「友好的な交流」の方が5％水準で有意に高く（友＞攻）、「攻撃的な交流」より「その他」の方が1％水準で有意に高かった。（他＞攻）。一方、L群にも有意な差が見られた（$F(2,24)=18.58$、$p<.001$）。多重比較の結果、「攻撃的な交流」より「友好的な交流」の方が0.1％水準で有意に高く（友＞攻）、「その他」より「友好的な交流」の方が0.1％水準で有意に高かった（友＞他）。

t検定の結果、M反応の形態水準に2群間で有意な差は見られなかった（$t(23)=0.09$, n.s.）（$t(23)=0.43$, n.s.）。

Table 7　2人の人間像の相互交流のあり方

	H群	L群
友好的な交流	11 (44.0)	3 (37.5)
攻撃的な交流	1 (4.0)	2 (25.0)
交流なし	13 (52.0)	3 (37.5)
合計	25	8

( ) 内は％

Table 8　M反応の形態水準の平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
M+%	69.83	36.62	68.73	28.29	0.09
M−%	30.17	36.62	24.61	22.03	0.43

(5)　カードⅡ、Ⅲ、ⅦのH反応の出現数

Table 9 にカードⅡ、Ⅲ、ⅦのH反応の出現数の平均値と標準偏差を記した。t検定の結果、2群間で有意な差は見られなかった（$t(23)=0.00$, n.s.）。

Table 9　カードⅡⅢⅦでのP反応の平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
人間P反応	1.60	1.08	1.60	1.06	0.00

(6)　衣服への言及

Table10に衣服反応の出現数の平均値と標準偏差、Table 11に衣服反応の内容を記した。衣服反応の出現数は、t検定の結果、2群間で有意な差は見られなかった（t (23) =0.98, n.s.)。衣服反応の内容についてのx^2検定の結果、有意な差は見られなかった（$x^2(3)=2.70$, n.s.)。分散分析の結果は、H群に有意な差が見られ（F (3,36) =6.49、p＜.05)、多重比較の結果、「保護的な機能をもつ衣服」より「一般的な衣服」の方が5％水準で有意に高かった（般＞保)。一方、L群にも有意な差が見られた（F (3,56) =8.07、p＜.001)。多重比較の結果、「保護的な機能をもつ衣服」より「一般的な衣服」の方が0.1％水準で有意に高く（般＞保)、「保護的な機能をもつ衣服」より「装身具」の方が5％水準で有意に高かった（装＞保)。

Table10　衣服の平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
衣服％	3.50	3.27	3.47	1.73	0.03

Table11　衣服反応の分類

	H群	L群
一般的な衣服	20 (57.1)	25 (47.2)
特殊な衣服	6 (17.1)	13 (24.5)
保護的な衣服	1 (2.9)	0 (0.0)
装身具	8 (22.9)	15 (28.3)
合計	35	53

（　）内は％

(7)　Eye反応の出現

Table12にEye反応の出現数の平均値と標準偏差、Table13にEye反応内容を記した。t検定の結果、Eye反応の出現数は2群間で有意な差は見られなかった（t (23) =1.06, n.s.)。Eye反応の内容についてのx^2検定結果、有意な差は見られなかった（$x^2(2)=1.48$, n.s.)。分散分析の結果は、H群で有意傾向が見られ（F (2,27) =2.74、p＜.1)、L群では有意な差は見られなかった（F (2,42) =1.29, n.s.)。有意な差は見られなかったが、両群共に「脅威的」の出現数が多い。

Table12　Eyeの平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
Eye	0.80	1.14	0.33	1.05	1.06

Table13　Eye反応の内容分類

	H群	L群
脅威的	6 (75.0)	4 (66.7)
好意的	1 (12.5)	2 (33.3)
その他	1 (12.5)	0 (0.0)
合計	8	6

（　）内は％

(8)　Mask反応の出現

Table14にMask反応の出現数の平均値と標準偏差、Table15にMask反応内容を記した。t検定の結果、Mask反応の出現数は2群間で有意な差は見られなかった（t (23) =0.23, n.s.)。x^2検定結果、Mask反応の内容について有意な差は見られなかった（$x^2(2)=1.71$, n.s.)。分散分析の結果もH群（F (2,27) =2.25, n.s.)とL群（F (2,42) =0.88, n.s.)に有意な差は見られなかったが、Mask反応の出現数はH群よりL群の方が多い傾向が見られた。

Table14　Maskの平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
Mask	0.20	0.42	0.53	0.91	1.23

Table15　Mask反応の内容分類

	H群	L群
脅威的	2 (100.0)	5 (50.0)
好意的	0 (0.0)	2 (20.0)
その他	0 (0.0)	3 (30.0)
合計	2	10

（　）内は％

(9)　FK反応の出現

Table16にFK反応の形態水準の平均値と標準偏差、Table17にFK反応の内容の結果を記した。t検定の結果、FK反応の形態水準は2群間に有意な差は見られなかった。x^2検定結果、FK反応の内容に有意な差は見られなかった（$x^2(5)=5.43$, n.s.)。分散分析の結果、H群で有意傾向が見られた（F (5,54) =1.98、p＜.1)。L群では、有意な差が認められ（F (5,84) =3.63、p＜.01)、多重比較の結果、「奥行き」より「高さ」の方が5％水準で有意に高く（高＞奥)、「上から眺める」より「高さ」の方が1％水準で有意に高かった（高＞上)。

Table16　FK反応の形態水準の平均値と標準偏差

	H群		L群		t値
	M	SD	M	SD	df=23
FK+%	48.33	47.44	74.50	40.80	1.47
FK−%	21.67	36.90	5.62	13.71	1.32

Table17　ＦＫ反応の内容分類

	Ｈ群	Ｌ群
大きさ・立体	6 (46.2)	12 (41.4)
鏡に映っている	1 (7.7)	4 (13.8)
水面に映っている	2 (15.4)	8 (27.6)
奥行き	1 (7.7)	2 (6.9)
上から眺めている	2 (15.4)	0 (0.0)
風景	1 (7.7)	3 (10.3)
合計	13	29

( ) 内は%

Ⅴ．考　察

本研究では、対人恐怖的心性の高い人、低い人の持つ対人関係のあり方や不安などの人格特性を明らかにするために、ロールシャッハ・テストを用いた。その結果、各個人の個性的なパーソナリティ像が見られたが、各スコアから病的なパーソナリティ像は見られなかった。このことから、本研究の被験者を平均的な青年期に属している健常青年と判断してもよいと思われる。ただし、本研究は女性のみが対象なので、男女合わせた一般的な健常青年とは一概に言えないが、青年期の傾向として述べていきたい。ここでは、筆者の仮説の検証や本研究で用いたロールシャッハ変数と指標に関して得られた結果から、考えられる対人恐怖的心性の高い人、低い人についての人格特性を明らかにしたい。

1．仮説①：Ｈ群はＬ群より、衣服反応が多く出現する

衣服反応の出現については両群共に差が見られなかったため、この仮説は棄却される。村澤（2003）は、大学生より対人恐怖症者の衣服反応の出現率の低さから、対人恐怖症者の対人意識の低さを明らかにしたが、心性の高い人と低い人では対人意識に差がないことが明らかになった。この違いは、対人恐怖症者と心性の高い人に近い特性がありながら、神経症類型の一つである対人恐怖と健常青年の対人恐怖傾向という程度の差が表れた結果だと考えられる。また、出現では差が見られなかったが、反応内容に関しては両群で異なった結果が得られた。心性の高い人は、一般的な衣服が高かった。つまり、上に着て身体の大部分を隠す傾向が見られた。このことは、他人の考えを理解できないなど対人不信感や警戒心を示すことが多いことから、対人関係上の不安の高さや防衛が示唆される。防衛に関しても、漠然とした不安に対して、全体を防衛しているのではないかと考えられる。一方、心性の低い人は、高い人と比較して装身具が多いことに注目したい。本研究の被験者が女性のみで、女性は比較的装身具を見やすいことも一つの要因として関係していることも考慮した上で述べる。装身具とは、部分的に身体を覆い隠すものであり、自分を飾るものでもある。このことから、２つのことが考えられる。１つは、心性の低い人は、不安が低いため、ある部分を防衛することで、対人関係のバランスをとることができると考えられる。もう１つは、自分自身を飾ることで不安を覆い隠しているとも考えられる。内在する不安に対して、飾ることで不安のメカニズムを変化させる代償行動とも考えられる。このように対処の仕方に幅があり、自由さがあると思われる。これらのことから、心性の高い人と低い人に、防衛する対処法に違いが認められた。

2．仮説②：Ｈ群はＬ群より、Ｈ反応よりＨｄ反応が多く出現する

両群とも出現数がほぼ同じで、Ｈ反応とＨｄ反応も差が見られなかったため、この仮説は棄却される。対人恐怖的心性の意識の差はあっても、表れた不安の度合には差がないことが明らかになった。

3．仮説③：Ｈ群はＬ群より特殊な人間像が多く出現する

Ｈ群は脅威的な人間像を多く見て、Ｌ群では脅威的な人間像をあまり捉えないことから、この仮説は支持された。この結果は、堀尾（1973）が対人恐怖症者が不快でネガティブな人間像を多く認知していると述べていることと一致している。心性の高い人が脅威的な人間像を認知することが多いということは、その分抱えている不安、もしくは、不安を抱く傾向が高いと考えられる。つまり、他者を自分に対して、害を与えたり、不快にさせる存在として捉えている傾向があることを示唆しているのではないかと思われる。一方、心性の低い人は、脅威的な人間像を認知する傾向が少なく、感情を伴わない人間像を多く見ていることから、不安傾向が低いと考えられる。これは、心性の低い人が対人恐怖的心性の自覚が低いことと一致していると思われる。

4．有意傾向が見られたロールシャッハ変数：Ｆ/Ｃについて

Ｆ/Ｃは、Ｈ群のみに出現したロールシャッハ変数であるため、この表す意味が心性の高い人の人格特性の傾向になると思われる。情緒的刺激を受けた場合に、自分自身の感情を伴わない恣意的な対処を行い、対人関係において情緒的な関わり合いを回避しようとする傾向が見られる。それは、対人関係において何らかの不安や緊張が存在しているため、ありきたりで表面的な関わりをすることで深い情緒的な関わりをすることを回避しようと努力しているが、形態水準の低さも関係して、結果的に失敗していると考えられる。これらのことから、心性の低い人より高い人の方が、対人関係において感情を伴わない恣意的な対処を行い、自分の情緒面を外部に表出しない傾向があると示唆される。

5．ロールシャッハ指数：Ｍ反応の内容と質について

Ｍ反応の形態水準に関しては、Ｈ群の方がコントロー

ルに失敗して下がると予想していたが、結果的に、両群に差は見られなかった。M反応の２者間の相互交流のあり方についての傾向は２群間で違いが見られた。心性が高い人は、２つの見方が考えられる。１つは、対人関係において友好的な交流をする傾向が見られた。もう１つは、対人関係において活発で積極的な交流が低い傾向が見られた。この２つは相反する傾向であるが、心性の高い人の中にはこの２つが混ざり合って存在していると考えられる。つまり、現実の対人関係において積極的な行動をとりながら、一方では、他者との深い情緒的関わりを避けていると考えられる。この結果は、高瀬（1999）の不安障害患者が積極的交流がない反応を多く産出し、活発な相互作用を欠き、友好的な相互交流がある反応をほとんど産出しなかったことと共通していると言える。心性の高い人は、不安が高いため積極的な相互交流を欠くこともあるが、不安障害患者と異なり健康的な水準にあるため、活発で積極的な相互交流を行なうことも可能だと考えられる。一方、心性の低い人は、心性の高い人と比較すると頻度は少ないが、友好的な相互交流をみることができ、他者との深い情緒的関わりを避けることなく、心性が高い人よりも積極的な関わりを行うことが可能だと考えられる。また、心性の高い人と低い人には、対人関係における積極的な関わりが多く見られ、他者を攻撃する関わりの傾向は低いことが示唆される。

6．ロールシャッハ指標：Eye反応

堀尾（1973）が、対人恐怖症者がEye反応の出現が多かったと述べているが、心性の高い人と低い人の出現に差が見られなかった。しかし、参考としてどのような目を見たか調べると、心性の高い人と低い人共に、脅威的な目に注目し、認知していることがわかる。このことから、他者の存在や自分自身を意識するなど対人恐怖的心性の傾向を持っているかもしれないが、直接的に投影されるほど認知していないのかもしれない。心性の程度で差が見られると思っていたが、なかなか直接的に見えにくいものと考えられる。

7．ロールシャッハ指標：Mask反応

H群とL群でのMask反応の出現では差が見られなかったが、出現数はL群の方が多い。L群の方が、自己を回避する傾向があると考えられ、求められている社会的役割を演じようとする適応性が高いと言える。このことについては、心性の低い人の不安の低さが関係しているかもしれない。しかし、差が見られないため、不安の低さが関係しているという可能性について言及するだけに留める。

8．ロールシャッハ指標：ＦＫ反応

H群とL群で、ＦＫ反応の出現と形態水準の差は見られなかったが、出現頻度は心性が高い人より低い人の方が多い。そのため、心性の低い人の特徴として言えるのではないだろうか。心性が低い人は有意に大きく見やすく、不安を遠くではなく大きく見ている。つまり、不安を大きく認知して対象と直面しているが、形態水準も保っていることから、不安の処理に成功している。統制できているので不安にまきこまれることもなく、うまく不安を処理できていると示唆される。

Ⅵ．事　例

対人恐怖心性尺度のH群とL群の中から、H群の中で尺度得点が最も高い人、L群の中で尺度得点が最も低い人を取り上げることで、本研究の被験者内で尺度得点上、心性の自覚が最も高い人と低い人を比較することができる。本研究で取り上げたロールシャッハ指標の特徴を検討する。

＜事例１＞

ケース１：H群、尺度得点126点、23歳、女性

ロールシャッハ指標の特徴

①(H)＋(Hｄ)＜H＋Hｄは４＜５と現実人間を多く見て、H＋(H)＜Hｄ＋(Hｄ)は４＜５と部分反応を多く見ている。

②(H)＋(Hｄ)の内容は、脅威的が２つ、好意的が２つ見られた（脅＝好）。

③決定因がM反応のH反応は、カードⅢで１つ見られた。

④相互交流は見られなかった。

⑤カードⅡ・Ⅲ・ⅦでH反応のＰ反応は、カードⅢで１つ見られた。

⑥衣服反応は、一般的な衣服が１つ、特殊な衣服が２つ、装身具が２つ見られた（般＜特＝装）。

⑦Eye反応内容は脅威的な目が２つ見られた。

⑧Mask反応は見られなかった。

⑨ＦＫ反応は見られなかった。

これらのことから、上記のロールシャッハ指標を基に考察する。非現実的人物より現実的人物を見やすいが、全体より部分で見ていることから、不安を感じやすい傾向がある。内界の安定性が弱いため、感情コントロールも弱く、あまり感情を出さない。また、社会的関心は高いが、相互交流が見られないのは対人不安をもっているからだと考えられる。

以上のことから、普段、日常生活でも自覚している不安がロールシャッハ・テスト上でも出ていることがわかる。現実吟味力が弱い傾向にあるため不安処理に失敗している。つまり、心性の高い人は、意識水準と無意識水準で同じように不安が表れていることが示唆され、その不安の対処に失敗しやすいと考えられる。対人関係については、相互交流が低い傾向にあると思われる。

ケース１：H群

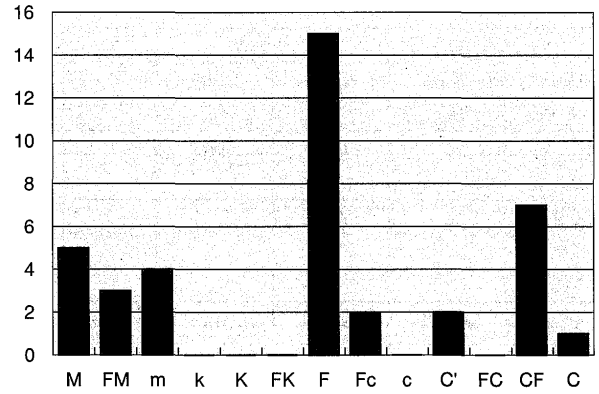
Scoring List

Card No. & Resp No.		R 1 T・RT& Position	Location		Determinant		Content		P
			Main	Add	Main	Add	Main	Add	
Ⅰ	1	0’ 12” ∧	dr		FM－＋	FC’	A		
			dr	S	F－＋		Obj	Eye	
		1’ 12”	W	S	FC’±		(Hd)		
Ⅱ	1	0’ 15” ∧	Wc		F±		Atb		
		0’ 45”							
Ⅲ	1	0’ 10” ∧	D+D		M±		H		P
	2	0’ 38” ∧	D+D		F±	mF,CF	(A)	Fire	
			D+D		mF±	CF	Fire		
		1’ 05”							
Ⅳ	1	0’ 14” ∧	W		F±		Pl		
	2	0’ 35” ∧	D+D		F±		Cloth		
	3	1’ 15” ∧	dr		F±		Ad		
		1’ 25”							
Ⅴ	1	0’ 15” ∧	W		Fc±		H	Cloth,Orn	
	2	0’ 26” ∧	W		F±		A		P
	3	0’ 55” ∧	W		F±		H	Travel	
		1’ 18”							
Ⅵ	1	0’ 17” ∧	dr		F±		Music		
	2	0’ 36” ∧	W		F±		Food		
	3	1’ 20” ∧	dr+dr		F－＋		Obj		
		1’ 42”							
Ⅶ	1	0’ 17” ∧	D+D		M±		Hd	Orn	
	2	1’ 07” ∧	D+D		F±		(Hd)	Eye	
	3	1’ 58” ∧	D+D		F±		Obj	Cl	
	4	2’ 09” ∧	W		Fc±		Cl		
		2’ 15”							
Ⅷ	1	0’ 19” ∧	D+D		FM±	CF	A	Pl	P
	2	1’ 12” ∧	dr+dr		FM－＋	M	A	Hd	
	3	0’ 35” ∧	Wc		CF－＋		Food		
		1’ 44”							
Ⅸ	1	0’ 07” ∧	W	S	M－＋		Hd	Abst	
	2	1’ 48” ∧	dr		mF－＋		Fire		
	3	2’ 22” ∧	D+D	S	F－＋		Geo		
		2’ 41”							
Ⅹ	1	0’ 19” ∧	W		CF－＋		Art		
	2	0’ 44” ∧	W		M－＋	Csym	(H)	Abst	

Summary Scoring List

R(total response)	31	W:D	15： 9	M:MF	5.5： 3
Rej(Rej/Fail)	0（0／0）	W%	48%	F%/ΣF%	48/84
TT(total time)	16’ 46”	Dd%	23%	F+%/ΣF+%	67/62
RT(Av.)	1’ 41”	S%	0 %	R+%	52%
R 1 T(Av.)	0’ 14”	W:M	15：5.5	H%	29%
R 1 T(Av.N.C)	0’ 15”	M:ΣC	5.5：5.8	A%	19%
R 1 T(Av.C.C)	0’ 14”	E.B FM+m:Fc+c+C’	5.5：3.5	At%	3 %
Most Delayed Card&Time	Ⅷ 0’ 19”	Ⅷ＋Ⅸ＋Ⅹ／R	35%	P(%)	3（10%）
Most Disliked Card	Ⅱ	FC:CF+C	0 ：5.5	Content Range	13
		FC+CF+C :Fc;c;C’	5.5：3.5	Detreminant Range	7
				修正 BRS	6

Psychogram



＜事例２＞

ケース２：Ｌ群、尺度得点27点、21歳、女性

ロールシャッハ指標の特徴

①Ｈ＋Ｈｄ＞(Ｈ)＋(Ｈｄ)は３＞２と現実人間を多く見て、Ｈ＋(Ｈ)＞Ｈｄ＋(Ｈｄ)は４＞１と全体反応を多く見ている。

②(Ｈ)＋(Ｈｄ)の内容は、好意的が１つ、その他が１つ見られた（好＝他)。

③決定因がＭ反応のＨ反応はカードⅡに１つ、カードⅣに１つ、カードⅧに１つ、合計３つ見られた。

④友好的な相互交流は、カードⅡで１つ見られた。

⑤カードⅡ・Ⅲ・ⅧでＨ反応のＰ反応は、カードⅡで１つとカードⅧで１つ見られたが、カードⅢでＨ反応を見ていない。

⑥衣服反応の内容は、一般的な衣服が１つ、特殊な衣服が１つ見られた（般＝特)。

⑦Eye 反応は見られなかった。

⑧Mask 反応は見られなかった。

⑨ＦＫ反応はカードⅧで１つ見られた。

これらのことから、上記のロールシャッハ指標を基に考察する。社会的関心は高く、対人認知や社交性、相互交流は良好である。しかし、一般にＨ反応を直接的に見ることが多いカードで見ることができなかったため、何らかの対人関係に対するショックが示唆される。不安状況では、強いショックと不安が生じているが、統制する力を持っているため適切に対処し、それ以外はまきこまれることもなく良好である。

以上のことから、普段、不安をあまり自覚していないが、投影法のような漠然とした不安状況に置かれると強

ケース２：Ｌ群

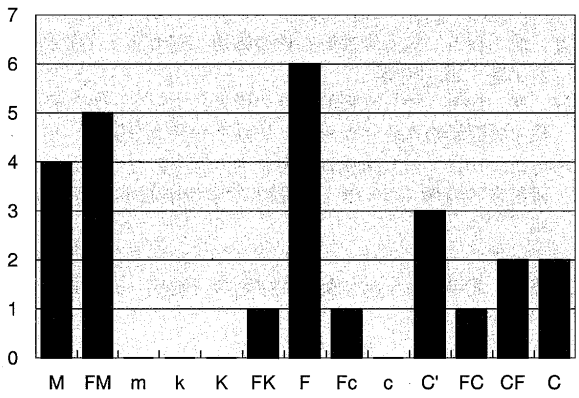
Scoring List

Card No. & Resp No.		R1T・RT& Position	Location		Determinant		Content		P
			Main	Add	Main	Add	Main	Add	
Ⅰ	1	0’03” ∧	D+D		M±		(H)	Cloth	
	2	0’35” ∧	W	S	F±		(Ad)		
		0’57”							
Ⅱ	1	0’29” ∧	W	S	M±		H	Cloth	P
		0’35”							
Ⅲ	1	0’28” ∧	dr		F－＋		Sex		
		0’33”							
Ⅳ	1	0’20” ∧	W		M±	FC’	H	Obj	
		1’11”							
Ⅴ	1	0’35” ∧	W		FM±	FC’	A		P
	2	1’20” ∨	W		FM±	FC’	A		P
		1’25”							
Ⅵ	1	0’20” ∧	W		F±		Music		
	2	0’37” ∧	Wc		F±		Aobj		P
		1’05”							
Ⅶ	1	0’16” ∧	W		M±	Fc,FK	H	Obj,Cloth	P
		1’03”							
Ⅷ	1	0’21” ∧	W		FM－＋	Csym	A	Pl,Abst	
	2	0’49” ∨	W		mF±	CF	噴火	Na	
		1’11”							
Ⅸ	1	0’30” ∧	Wc	S	F±	CF,C	A	Pl,Na	
		1’13”							
Ⅹ	1	0’04” ∨	S	dr	F－＋		(Hd)		
	2	0’45” ∧	D+D		FM±		A	Pl	
			D		FM±		A	Pl	
			D+D		FC±		A		
		1’00”							

Summary Scoring List

R(total response)	17	W:D	11：4	M:MF	4：5
Rej(Rej/Fail)	0（0/0）	W%	65%	F%/ΣF%	35/94
TT(total time)	10’12”	Dd%	6 %	F+%/ΣF+%	67/81
RT(Av.)	1’01”	S%	6 %	R+%	76%
R 1 T(Av.)	0’27”	W:M	11：4	H%	29%
R 1 T(Av.N.C)	0’24”	M:ΣC	4：3	A%	47%
R 1 T(Av.C.C)	0’30”	E.B FM+m:Fc+c+C’	5：2	At%	0 %
Most Delayed Card&Time	X 0’40”	Ⅷ＋Ⅸ＋X／R	41%	P(%)	5（29%）
Most Disliked Card	Ⅱ	FC:CF+C	1：2	Content Range	6
		FC+CF+C :Fc;c;C’	3：2	Detreminant Range	4
				修正 BRS	11

Psyshogram



い不安が生じると考えられる。内界から不安が生じてくるが、自我が強く現実吟味力も良好なため、感情をコントロールする力も持っていると考えられる。つまり、心性の低い人は、意識水準では不安をさほど感じていないが、無意識水準では普段感じていない不安が生じることが示唆され、その不安を統制し、適切に対処することができると考えられる。対人関係については、相互交流も高い傾向にあると思われる。

Ⅶ. 総合考察

ここでは、本研究で検証した仮説、ロールシャッハ指標から考えられる心性の高い人と低い人の特徴などについて述べていきたい。

1．仮説について

まず、仮説①では、衣服反応で両群に有意な差が見られなかったために棄却された。村澤（2003）は対人恐怖症者群と大学生群との出現率の有意な差を述べているが、本研究では被験者が健常青年のみということが有意な差が見られないことに関係しているのではないだろうか。心性が高くても、健常圏内にいる同じ健常青年同士なので、多少の個人差は見られてもロールシャッハ・テスト上では差が見られなかったと思われる。次に、仮説②では、H反応＜Hd反応の出現も両群に有意な差が見られなかったために棄却されたが、これも衣服反応と同様のことが言える。心性の高い人と低い人の間で不安の意識に差があっても、表れた不安の度合は同じ健常圏内にあるため、差が見られなかったと思われる。最後に、仮説③では、特殊な人間像に関しては支持されたが、これは両群での差の比較ではなく、別々に検討した心性の高い人の特徴と低い人の特徴を比較したことで、両群の違いとして明らかになったものである。

これらのことから、各心性の中の特徴に違いは見られても、心性の高い人と低い人のロールシャッハ・テスト上の有意な差は見られないということが明らかになった。

2．指標から考えられる特徴について

本研究では、心性の高い人と低い人の特徴として、対人関係のあり方、不安への対処の仕方という、2つの人格特性が明らかになった。

心性の高い人は、対人関係において不安が生じやすく、何らかの窮屈さを感じている傾向があると思われる。また、外部からの刺激に対して、感情を伴わない恣意的な対処をすることで、深い情緒的な関わりを回避する傾向も見られた。相互交流に関しても、積極的な行動をとろうとする反面、不安の高さから他者との深い情緒的関わりを回避する傾向があるため積極的な行動がとりにくいことも示唆される。相互交流においてアンビバレントな行動様式をとることが考えられる。不安への対処の仕方は、不安が高いため、全体的に防衛する傾向が見られた。

心性の低い人は、対人関係において、他者との深い情緒交流を回避することなく、積極的な行動をとることができると考えられる。不安への対処の仕方は、2つの対処法が考えられる。1つは、不安を感じている部分を防衛することで対処している。もう1つは、自分自身を飾ることで不安を覆い隠し、不安の代償行動で対処している。これらのことは、不安が低く、現実吟味力が高く感情のコントロールを適切に行うことができるため、バラ

ンスをとることができていると思われる。

このように、心性の高い人と低い人の対人関係のあり方と不安への対処の仕方において、両群の傾向が明らかになったと言える。本研究で明らかになった心性の特徴は、被験者の中からサンプルとして取り上げた事例の結果からも近いことが言える。また、取り上げた事例の結果からも、一つの傾向が見られた。心性の高い人は、普段から不安の意識を持っているが、不安を導きやすい投影法でも、同様に不安が生じている。この際、主観的傾向が見られるため、現実吟味力が下がり、感情コントロールがうまくいかないと思われる。一方、心性の低い人は、普段から不安を意識することは少ないが、投影法では不安が生じて、一時的に現実吟味力が下がっている。しかし、すぐに回復し立て直すことができる感情コントロールと現実吟味力を持っていると思われる。これらの結果の検証は今後必要だと思われるが、今回の研究ではこのような傾向を持っていることが示唆された。

以上のように、本研究では、心性の高い人と低い人の特定の人格特性が明らかになったが、両群におけるロールシャッハ・テスト上では有意な差は見られなかった。これは、いくつかの理由が考えられる。1つ目は、H群10名、L群15名と統計的な検定に耐え得るほどの数ではなかったことを挙げることができる。被験者に関しては、今後、被験者数を増やすことが必要だと考えられる。2つ目は、本研究の被験者が女性のみであったということである。今後は、今回明らかになった人格特性が、男女共に言えるかを検討する必要があるだろう。3つ目は、これまで述べた理由も含めた上で述べる。神谷（1999、2000）の場合も両群にロールシャッハ・テスト上で有意な差が見られなかったことから、心性の程度では差が出にくいことが明らかになったと言える。つまり、心性が高い人と対人恐怖症者の悩みの傾向は同じでも、質は異なるのである。心性が高い人も低い人も同じ健常者圏内であるため、意識上では差が見られても、その質に明確な差が出にくいのだろう。これらのことから、今後は、心性の高い人と対人恐怖症者のロールシャッハ・テストの比較をして、本研究で用いたロールシャッハ指標と明らかになった心性の高い人の人格特性を検討する必要があるように思われる。

Ⅷ. 謝　辞

本研究を進めるにあたり、御懇切な御指導や、貴重な御助言を賜りました原口芳博教授に深く感謝申し上げます。また、本検査に協力してくださった学生の皆様に厚くお礼申し上げます。

注

福岡女学院大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻研究生

＜参考・引用文献＞

相河和佐　2003　青年期における対人恐怖心性とロールシャッハ反応　金城学院大学大学院人間生活学研究科論集　巻号3　1-10
笠原　嘉　1993　対人恐怖　新版精神医学事典　岩崎学術出版社
片口安史　1987　改訂　新・心理診断法　金子書房
神谷美里　2002　対人恐怖的心性とロールシャッハ反応　ロールシャッハ研究法　4，11-19
神谷美里　1999　対人恐怖的心性とロールシャッハ人間反応　中央大学文学部紀要　34，17-26
木場清子　1980　ロールシャッハ身体像境界得点についての基礎的研究　ロールシャッハ研究24　33-51
木村　駿　1982　日本人の対人恐怖　勁草書房
高橋雅春　1997　ロールシャッハテストにおける(H)反応の細分類　関西大学社会学部紀要　8，1，307-313
高橋雅春・北村依子共著　1981　ライブラリ心理学11　ロールシャッハ診断法Ⅰ　サイエンス社
詫摩武俊監修　1998　性格心理学ハンドブック　福村出版
永井　徹　1991　対人恐怖的心性の構造　聖セシリア女子短期大学紀要　16，50-55
永井　徹　1991　対人恐怖的心性の構造について―対人恐怖的心性の質問紙の作成　聖セシリア女子短期大学紀要　16
堀尾治代　1973　対人関係に障害をもつ青年のロールシャッハ人間反応の特徴について　京都大学学生懇話室紀要　3，26-36
村澤和多里　2003　ロールシャッハテストからみた現代の対人恐怖症　北海道大学大学院教育学研究科紀要　91